

私が初めて書いた感話の内容は、入学して三週間程たったころの「恵泉に入学して感じたこと」です。まだ学校になれていないうちに書きました。恵泉に入学して、初めてキリスト教に触れ、礼拝を経験して感じたことを書いたのを覚えています。二年前の中学受験の時私は塾に入るのが遅く四教科勉強しては間に合わないので国算の二教科のみ勉強しました。ですから恵泉の受験は一日の午後の一回のみチャンスでした。しかし、三日ほど前からせきがでるようになり、体調はあまり優れませんでした。そんな中で迎えた入試当日の午前に受験した学校は、国語・算数ともに全く手応えを感じず、「これはきっと不合格だろう。」と思う内容でした。そして、午後恵泉を受験しましたが、一カ月前程に解いた過去問とは全く傾向が変わっていて、落ちついて解くことができませんでした。結果は、絶対大丈夫だと思える程の手応えは得られませんでした。その日の夜は恵泉の合格発表のため、七時にはふとんに入ったものの何度か目が覚めました。翌日父から合格を聞いた時はとても驚き嬉しかったのを覚えています。

今、恵泉に入学し二年間が経ちました。その中で私は、はっきりとは分かりませんが、六、七回感話を書いていると思います。入学前に学校説明会でもらったパンフレットには上級生になると感話を原稿用紙七、八枚書く人もいると書いてあり、日々感じたことを原稿用紙七、八枚も書けるのかと驚いたのも覚えています。私が初めて書いた感話は、先程言ったように「恵泉に入学して感じたこと」なのでテーマがありますが、一年生の夏休みに宿題として出された感話にはテーマがなく、何を書けばよいのかとても悩みました。また、テーマがあるものでも、二年生の冬休みに宿題に出された感話のテーマ「人の痛みと共に生きる」は解釈が難しく、どうしようか悩みながら書きました。悩んだ末に、昨年度の六月に新幹線でおこった無差別殺人事件の被害者と、その家族について書きました。しかし、テーマにそった内容が書けているのか、とっていました。クラス礼拝でいろいろな人の感話を聞いて、同じテーマについて書いているのに、こんなに内容が違ったりするのだということや、こういう解釈のしかたもあるのだなと思い、一つのテーマに対してたくさんの解釈の仕方があっていいのだという事を学びました。私はこの点が感話の特徴だと感じています。間違っているかもしれませんが、作文や読書感想文はどうしても内容が一定になりがちだと思います。作文や読書感想文なら、小学生の頃に宿題に出され何度か書いたことがあります。多少の意見の違いや文章の上手、下手はありますが、結局はみんな同じ本を読み同じようなことを考えていたのだろうと私は思います。一方感話は、字の通り感じたことをありのままに話すもので、様々な解釈ができるテーマでそれぞれの個性がでていると思います。つまり、感話には答えがないということです。作文が悪いというわけではなく、「感話」と「作文」はとても似ている気がします。それぞれちょっとした特徴や、良い所、悪い所をどちらも備えていると思います。

個性を尊重している恵泉ですが、実は「感話」もその一つなのではないか、ということに今回この感話を書くにあたって気づかされました。この一年で、何度か感話を書くと思います。そのときには個性の事を頭に入れて書こうと思います。学年が上がるにつれ、書く量が徐々に増えると思いますが、日々感じたことを素直に書けるようになりたいと思います。